

唆を与えるものである。

細見和之 (ドイツ思想)

今年は何ととっても、マルクスに尽きる。『資本論』全三巻を、大月書店の『マルクス・エンゲルス全集』であらためて精読したのである。私見によれば、大月書店の「マルエ全集」は日本の書籍文化の記念碑のひとつである。おそらく、あれだけの規模で、あれだけの研究者が文字どおり心血をそそぐ企画は、今後、二度と現われまいだろう。

その関係もあって、今年には以下の著作も紐解くことになった。

- 1 ロバート・L・ハイルブローナー『入門 経済思想史 世俗的思想家たち』八木甫他訳、ちくま学芸文庫、二〇〇一年
- 2 ロバート・L・ハイルブローナー『私は、経済学をどう読んできたか』中村達也他訳、ちくま学芸文庫、二〇〇三年
- 3 杉本栄一『近代経済学の解明』上下、岩波文庫、一九八一年

ハイルブローナーの本は経済学の素人にもとても親しみやすく書かれている。『入門 経済思想史』のほうには、アダム・スミスからケインズをへて、シュンペーターまで、それぞれの経済思想家の人生のエピソードをまじえて愉快だし、『私は……』のほうは主な経済

学説からの、決定的な引用で織り成されている。

一方、杉本栄一の著作は、一八六〇年代から七〇年代を「近代経済学」の成立期としてオーストリア学派における「限界効用説」から、マルクスをへて、ケンブリッジ学派以降までを論じている。一九五〇年前後に書かれた本で、古いには違いないが、ケインズとマルクスを、マルクスに焦点を置いて等距離に論じるスタイルとても惹かれた。「近経 VS マルクス」という発想そのものが、けっして自明ではないことを教えられる新鮮。

私はもうすぐ五十歳をむかえるが、しばらくは経済学の学習をひとつの柱にすることにしよう。この年齢になって、まさか経済学をいちから学ぶことになるとは思ってもいなかった。

小西正捷 (南アジア文化史)

出版界は不況といいつつも、二〇一一年にはかくも専門的な大著が次々と出されたことに驚くばかりである。著者と出版社の労苦に敬意を表したい。とはいえ、いずれも五〇〇〜八〇〇ページ近くにもなる大著・労作ばかりで、とても本年中に読了してしつかりとコメントできるものではない。来年の宿題もたまるばかりであるが、もうあせる年齢でもない。

きたアフガニスタンとパロチスターンにおける遊牧と乾燥農業を巡る詳細な民族誌を、「争乱の現在」からヴィヴィッドに描く。

斎藤成也 (人類学)

- 1 W. Somerset Maugham, *Liza of Lambeth*, Penguin Books, 1992
- 2 Jeffrey Meyers, *Somerset Maugham: A Life*, Knopf, 2004
- 3 行方昭夫『モーム語録』岩波現代文庫、二〇一〇年
- 4 梅棹忠夫『回想のモンゴル』中公文庫
- 5 高野明広他編『生誕一〇〇年記念展 九展 カタログ』宮崎県立美術館・埼玉県立近代美術館・うらわ美術館・美術館連絡協議会

1と2 今年になってようやくアマゾンのKindleを購入した。ふたつはその成果である。翻訳として全集にはあるようだが、文庫本には入っていないモーム一八九七年の処女作を読んだ。快適なストーリー展開で、おもしろかった。つぎにモームの伝記を見つけた。彼がホモだったことはなんとなく知っていたが、その豪邸にはつねにパロチナーの男性がいたことが印象的だった。イアン・フレミングとの交流もおもしろい。007のMがアンジェンのRからヒントを得ていたとは。現在はKindleで *Of Human Bondage* を読んでみる。

3 モーム尽くしの最後は、モームがあまり流行らないことを悔やむ著者が集めた語録。含蓄のある言葉が並んでいる。

4 二〇年前に出た文庫の新装版。張家口にあった西北文化研究所での体験が著者のその後の大きな礎のひとつとなったことがよくわかる。必死の思いで日本に持ち帰った研究資料から、結局学術報告が出なかったのは不思議である。

5 美術家としてもっとも敬愛する英九さんの生誕一〇〇周年を記念して開催された展示会の図録。末尾にすべての作品のカタログをつけるというすかさず。やはり多くのファンがいるのだ。それにしても、点描画で埋め尽くされた展示会場は、至福の空間だった。

江口重幸 (精神医学)

1 ルイ・メナンド『メタフィジカル・クラブ』野口良平他訳、みすず書房、二〇一一年
以前から読みたかった本の邦訳。デュイとJ・アダムズのシカゴにおける協力体制など本書で初めて知る。パース父子や誤差の法則あたりを読むと、ハッキングの『偶然を飼いならす』や「テレバシー」を読んだ至福の時の記憶がありありとよみがえった。

2 Roger Luckhurst, *The Invention of Telepathy*, Oxford University Press, 2002

い。

1 宍倉佐敏編著『必携 古典籍・古文書料紙事典』八木書店
インドの書画の支持体・料紙についてデリーの出版社に校正刷りを返したばかり。もっと早くに本書に出会いたかった。

2 山路勝彦編著『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』関西学院大学出版会

この分野に関する近年最も重要な出版物。あわせて、板橋区立郷土資料館企画展(二〇一一年一〇月)「明治・大正期の人類学・考古学者伝」も参照。

3 廣田律子『中国民間祭祀芸能の研究』風響社

鬼、翁、將軍、神兵、盤古神、陳靖姑等々、目くるめくパンテオンの東アジアにおける深層と展開。数十年に及ぶフィールド調査と丹念な文献研究の成果は重い。

4 応地利明『都城の系譜』京都大学学術出版会

中国に偏りがちなこの種の議論をアジアの組上にのせ、とりわけインドとの比較に着目、その原型から他のアジア諸国に展開する「パロク」系譜を丹念に追う刺激的著作。

5 松井健『西南アジアの砂漠文化——生業のエートスから争乱の現在へ』人文書院
永年(三〇年余)著者がフィールドとして

先のが米国だとするとこれは英国の一九世紀末に焦点を当てたもの。ジェイムズ兄弟や心霊研究などで両者は結びついてくる。この時代への休止状態であった関心が呼び覚まされ、いざまたこうしたテーマに戻っていきたく切実に思った。

3 Albert Deutsch, *The Shame of the States*, Harcourt, Brace & Co., 1948

脱施設化以前のアメリカの巨大な州立精神病院の劣悪な状況を「国家の恥辱」として告発した本。必要があって古書サイトで購入したが年間で一番高価な書籍となった。初めて見るような写真が多く掲載されていて、壮麗な病院の外観と内部のギャップに目を見張る。なおこの関連で少し前に出版された中国の精神病院の写真集『忘れられた人々』馬小虎撮影、張大克・馬小虎文(第三書館、二〇〇六年)も改めて読むことに。自分が日々働いている精神科病院とは不思議な場所であることを今更のように痛感する。

4 さらにその延長で、加藤隆則『中国社会の見えない掟』(講談社現代新書、二〇一一年)に書かれた、現在中国において(おそらくは)精神障害を背景に殺人にいたった事件とその顛末を読む。よくここまでという渾身の取材。(日本の医療観察法がいいというつもりはないが)日本で同様の事件が生じた場合と何となく落差なのか。中国のジャーナ